線型代数学周遊　応用をめざして　正誤表

2016.7.17

頁	行	誤	正
p.13	l.12	$b \in A$	$v \in V$
p.23	l.14		つまり,$\dim_{\mathbb{R}}\mathbb{C} = 2$ です．因みに $\dim_{\mathbb{C}}\mathbb{C} = 1$
p.25	l.12	別の基底である	基底である
p.28	l.-5	$L \in C_0$	$L \in C_1$
p.33	l.13	レニムスケート	レムニスケート
p.35	l.10	(d) f に対して，	(d) 写像 f に対して，
p.37	l.9	右を追加	例えば $\mathrm{Hom}_{\mathbb{C}}(\mathbb{C},\mathbb{C}) \neq \mathrm{Hom}_{\mathbb{R}}(\mathbb{C},\mathbb{C})$ となります．
p.43	l.-6	$\mathbb{R}/\mathbb{Z}a$	$\mathbb{R}/\mathbb{Z}q$
p.43	l.-5	$(x+a)$	$(x+q)$
p.46	l.9	$A^* = A$ に	$A^* = A$ でかつ正 [11] に
p.46	脚注		[11] $A \in \mathfrak{B}$ が正とは A のスペクトル（固有 値）がすべて正であることです.A のスペ クトルに関しては p.139 を見よ．
p.48	l.12	$i(X') = X$	$i : X' \to X$
p.55	l.4	$V = \bigoplus Ke_i,\, W = \bigoplus Kb_j$	$V = \bigoplus_{i=1}^{n} Ke_i,\, W = \bigoplus_{j=1}^{m} Kb_j$
p.55	l.6	$V^* = \bigoplus Ke_i^*$	$V^* = \bigoplus_{i=1}^{n} Ke_i^*$
p.56	l.5	できません．	できませんが，適当な処理で (1) の両辺は同一視できます．
p.60	l.-10	$f, g \in \mathrm{Hom}_{\mathcal{B}}(A,B)$,	$f \in \mathrm{Hom}_{\mathcal{B}}(A,B)$, $g \in \mathrm{Hom}_{\mathcal{B}}(B,C)$
p.63	l.7	$\{s_1, \cdots, s_6\}$ の各原子	$\{s_0, \cdots, s_5\}$ の各炭素原子
p.66	l.8	例え，	たとえ，
p.77	l.-4		またこの事実は群の制限として $\mathfrak{S}_n$ の (i,k) を固定する 部分群（部分集合で群であるもの）$\mathfrak{S}_n^{(i,k)}$ を用意すれば余 因子が表現でき $\epsilon(i,k) = (-1)^{i+k}$ となることから判ります．
p.146	l.-9	着目したのが K	着目したのが A_K^n
p.152	l.-6	S'_a に対して	S'_a について
p.153	l.-8	直交した直線	直線
p.155	l.11	$\mathbb{R}^4$ であると	$\mathbb{R}^4$ で記述
p.158	l.12	$\sum_{i=1}^{n}$	$\sum_{i=1}^{m}$
10 章		図 10-4,5,6,7,8,9	図 10-3,4,5,6,7,8
	問題 10.1	図 10-4 の (a)	図 10-4 の左図
p.166	l.2	$\dfrac{\gamma}{\partial_z \gamma}$	$\dfrac{\gamma}{\sqrt{\partial_z \gamma}}$
p.168	l.6	$\partial_s^3 \psi_{t2} = \partial_s(u\psi_{t2})$	$\partial_s^3 \psi_{t2} = -\partial_s(u\psi_{t2})$
p.168	l.-4	形状である	形状をもつ
p.171	l.10	可積分条件と理解できます．	削除
p.171	l.15	定まります．	定まります．つまり，非線型性が線型空 間により決定されるのです．
p.172	l.4	x_{n-1} で	x_{n-1} が
p.172	l.4	$x_n = c + \varepsilon$	$x_n = c + \varepsilon$ $(\varepsilon \neq 0)$

頁	行	誤	正
p.175	l.13	数 m として	数 m を
p.208	l.9	定義 8.7	定義 8.3
p.210	l.12	加群の件	加群の圏
p.210	l.-6	$\mathrm{e}^{\sqrt{-1}a}$ となること	$\mathrm{e}^{\sqrt{-1}an}$ となること
p.221	l.-1	なす..	なす.
p.226	l.-7	$\iota : (-1,1) \to \mathcal{M}$	$\iota : (-1,1) \to U \subset \mathcal{M}$
p.230	l.9	∂_{x_i}	∂_{x^i}
p.262	l.-3	$(i-k)$	$(i-k)!$
p.263	l.6	$\mathbb{C}[x,\xi]$	$\mathbb{R}[x,\xi]$
p.265	l.9	Isam	Isham
p.275	l.10	ε は零を許さない	$\lvert q-p\rvert = 0$ は許さない
p.275	l.-7	$:=$	$=$
p.278	l.-10	$\mathcal{B}_{\mathcal{T}_{X_0},X_0} = \wp(X) =$	$\mathcal{B}_{\mathcal{T}_{X_0},X_0} =$
p.280	l.10	測度零集合	測度零集合族
p.280	l.15	μ の値をゼロにする	μ の値を適切に定める
p.281	l.1	$g(x)$	$f(x)$
p.283	l.-3	$f, g \in \mathcal{F}$	$f, g \in \mathcal{F}_U$
p.287	l.1	2 元 X,	2 元 x,
p.291	l.-13	$f :=$	$f :$
p.291	l.-12	$(\tanh(f(i)) - 1)/2$	$(\tanh(f(i)) + 1)/2$
p.311	l.13	今野紀夫教授	今野紀雄教授
p.311	l.13	井出勇介氏	井手勇介氏
p.311	l.-8	児玉祐二教授	児玉祐治教授